

不登校と家族の心理力動に関する一考察¹⁾

— 近年の事例研究を素材として —

黒 崎 優 美*

The Futoko phenonemon and the family-group psychodynamics

— A study based on recently published case studies —

Hiromi KUROSAKI

要 旨

本稿の目的は、近年の事例研究・報告内容を臨床期素材として用いることにより、筆者（2004）による家族グループ現象としての不登校に関する仮説を検証することである。そのために、まず主な専門誌から37の事例を抽出し、家族グループにおける作動グループと各基底的理想定グループ、さらに不登校状態にある本人の原子価を測定するための尺度をそれぞれ既存の尺度（黒崎，2000）を応用するなどし作成した。

これらの尺度を用いて、抽出した事例から得られた臨床的素材を測定した結果、不登校が、逃避原子価を持つ個人による（仮説3）、本人を含む家族グループの逃避的欲求を表現・充足する機能を持っている（仮説4）ことがほぼ全ての事例において認められた。家族グループにおける依存基底的理想支配（仮説1）と他の基底的理想定の抑制（仮説2）については一部の事例において、それらに相当する内容が認められた。

今後の課題としては、仮説1と2の検証における不十分な点を補うこと、また、自己評価の低さや「退行」など複数の事例において報告されている事象について、その無意識的な目的という観点から検討を行うことが必要であると考える。

I. 問題と目的

全国の公立小・中学校に在籍する児童生徒に占める不登校²⁾の児童生徒数割合が1%を越えたのは1995年度のことである。それ以降、多少の増減はあるものの、これを下回ることなく10年以上が経過し現在に至っている。現在では、公教育のみに依存するのではなく、フリースクール等のいわゆるオルタナティブ・スクールに対する関心が深まり選択肢が広がっている。しかしながら、依然として「学校に行きたい・行かなければならないが行けない」という不登校状態に苦しむ児童生徒や家族が多く存在していることもまた事実である。

筆者は、不登校を家族というグループの現象であるとする立場から、Bion (1961) の集団理論、平成18年9月29日受理 *神戸学院大学大学院

特にプロトメンタル・システムに基づく仮説を提示し(黒崎, 2004)、不登校経験者やその家族による手記や自験例を臨床的素材として用いることによりその検証を行ってきた(黒崎, 2005; 2006)。しかし、手記の内容には偏りの生じることが避けられず、また、自験例では情報の全体量が不十分であるという問題があった。

そこで本稿では、そのような問題点を解消するために、主な専門誌から近年の不登校に関する事例研究を集め、それらから抽出した臨床的素材を用いて仮説の検証を行い、不登校の家族グループ力動について明らかにすることを、その目的とする。

まず、本稿を進めていくのに不可欠な、Bion (1961) による集団理論、特にプロトメンタル・システムについて、そして、それを不登校の家族グループに応用することにより構築された4つの仮説を提示しておこう。

II. Bionによる集団理論

1) 作動グループと基底的想定グループ

Bion (1961) によれば、あらゆるグループには、現実的・意識的側面を表す「作動グループ」(work group: 以下、WG) と、それとは対照的な幻想的・無意識的側面を表す「基底的想定グループ」(basic assumption group: 以下、baG) とが共存している。なお、Bionは「グループ」という用語を、成員たちではなく精神的状態を表すために用いている。baGには、「依存」(dependency: 以下、baD)、「闘争/逃避」(fight/flight)、および「つがい」(pairing: 以下、baP) という3つの類型が存在するが、WGと共存関係にあるのは常に1つのbaGのみである。なお、本稿において筆者は、BionによるbaFを、Hafsi (2003) 等にならい、「闘争」(以下、baF) と「逃避」(以下、baFI) とに分けて取り扱うこととする。活動していないbaGの運命を説明するために、Bionはプロトメンタル・システムの存在を仮定した。

2) プロトメンタル・システム

Bion (1961) によれば、「プロトメンタル・システム」(protomenal system: 以下、PMS) は、3種のbaGの原型が心身未分化の状態が存在し、そこからbaG特有の情緒が供給されるような「母型」(matrix) である。活動していないbaGは、「知的集団(WG)と、作動している基礎仮定(baG)との間の共謀の犠牲」(p. 94、括弧内著者) となってここに閉じ込められている。また、PMSは「baGに関連するあらゆる不満、苦痛の母胎でもあ」(Hafsi, 2003) り、そこから集団疾患としての心身症や精神的病理が生じる。Bionによれば、「これらの疾患は、個人のなかに出現してくるが、その特徴は、打撃をうけるものが、個人よりもむしろ集団であることが明白である」(p. 95)。Bionは具体的に、社会病理としての結核を例にとってこのメカニズムを検証している。それによれば、結核は戦争中等にみられる流行病の一つであるが、これをグループの病理という側面からみた場合、その「原因」(cause) は、WGとbaFとの厳格な結びつき、或いは「共謀的」(conspiracy) 関係である。それは、グループにWG、およびbaF活動のみしか許さない状況を作り出し、その結果、他のbaGはPMSへと抑圧され母体を構成する。さらに、結核と「根源」

(affiliation) 的關係を持つのはそのうちの依存である。すなわち、結核の根源は、満たされない依存欲求にある。Bionは医学的な病因論を否定しているわけではないが、グループという側面から病理をみることによって、それらの原因論に新たな可能性を広げるだけでなく、根源や母体についても明らかにすることができると述べている。つまり、PMS現象は「集団の機能であり、したがって、集団のなかで研究されなくてはならない」(Bion, 1961; p. 96)。

筆者は、これまでに行われてきた不登校に関する研究の多くが、不登校を個人の問題や症状としてのみ捉えるものであり、本人を含む家族にとってそれが果たす機能や役割について論じたものがほとんどないことに注目し、不登校を、家族という「グループ全体」(group as a whole)におけるPMS現象として理解することが不登校を新たな観点から理解するのに役立つものと考え、以下の仮説を提示した。

Ⅲ. 家族グループと不登校に関する仮説

以下に述べる4つの仮説は、筆者が過去の不登校に関する研究をレビューした上で、BionによるPMS(プロトメンタル・システム)の観点から提示したものである(詳細は黒崎, 2004を参照)。ここでは、仮説を再度提示するに留める。

仮説1: 家族グループにおける、作動グループと依存基底的想定との結びつきが、

仮説2: 厳格な共謀的關係であるために、同グループにおける闘争・逃避、およびつがいの欲求が表現・充足されるための受け皿を失い、

仮説3: その結果として、逃避原子価を持つ家族グループメンバーがその受け皿となり、

仮説4: 不登校によって、自身および家族グループ全体の逃避的欲求が表現・充足されているであろう。

以上の仮説を検証するために、次のような方法で臨床的素材の抽出、および測定を行った。

Ⅳ. 方法

1) 臨床的素材の抽出

本稿の目的は、近年の不登校に関する事例研究や事例報告を臨床的素材として用いることにより、上記仮説の検証を行うことである。

そこでまず、インターネット検索サイトCiNii³⁾にて、「不登校・登校拒否」の何れかが題目に含まれる論文を、心理学、および教育学に関する主な専門誌に限定し、検索を行った。さらに、そのなかから事例を中心に取り扱った文献を絞り込んだ結果、『心理臨床学研究』で16、『精神分析研究』で4、『家族心理学研究』で3、『学校カウンセリング研究』で2、『応用教育心理学研究』で2、『教育心理学研究』で1、『子ども社会研究』で1、計29の文献がこれに該当した。1つの文献に複数の事例が含まれるものもあることから、それらの文献に含まれる全37事例を対象とした。

各事例の概要をまとめたものが、表1. である。これによれば、本人の性別は、女性が22名、

表1. 各事例の概要

事例	本人の学年・年齢	本人の性別	主に面談を受けた人物	面談の構造
1	小6	女	本人	行動コンサルテーション
2	高3	男	本人	個別面接
3	中3	女	本人	個別面接
4	中1	男	本人	訪問面接
5	中2	男	本人	訪問面接
6	中1	女	本人	個別面接
7	中2	男	母親	親の会
8	中2	男	本人	個別面接
9	高1	女	本人、母親	訪問相談
10	中2	女	本人	個別面接
11	16歳	女	本人	個別面接
12	高1	女	本人	個別面接
13	高2	女	本人、母親	母子並行面接
14	中2	女	母親	個別面接
15	中2	男	本人	訪問相談
16	中1	男	本人	訪問相談
17	中3	男	本人	訪問相談
18	小3	女	本人	個別面接(プレイセラピー)
19	中2	女	本人	適応指導教室での関わり
20	中2	女	本人	個別面接(箱庭)
21	中2	女	本人	個別面接
22	高1	女	本人	個別面接
23	中3	男	両親	合同面接
24	高1	女	両親、本人	家族療法
25	中3	女	本人、母親	個別面接
26	中3	女	母親	個別面接
27	中1	男	母親	個別面接
28	14歳	女	本人	個別面接(描画)
29	小6	男	本人	参加観察法
30	小6	女	本人	参加観察法
31	高1	男	本人	個別面接
32	高1	男	本人	個別面接
33	高1	女	本人、両親	家族面接、個別面接
34	中2	男	父親	個別面接
35	小3	男	母親	個別面接
36	高1	女	母親	個別面接
37	中1	女	両親、本人	個別面接

男性が15名であった。面談開始時における本人の年齢・学年は、小学3年から高校3年までと幅広く、最も多いのは中学2年であった。主に面談を受けた人物は、本人が最も多く23事例であったが、本人に加え母親や両親が並行的に面接を受けているもの、家族合同面接を行っているもの、それらを状況に応じて組み合わせ実施しているものなどさまざまであった。面談の構造については、個人面談の形態が最も多かったが、場所は医療機関や相談機関、校内相談室などさまざまであった。また、面談者についてもカウンセラー、医師、教師などが含まれていた。

これらの事例に含まれる、面接者・被面接者の言動や態度、理解や解釈の内容を臨床的素材として抽出し、臨床的素材として用いることとする。

2) 臨床的素材を測定するための尺度

本稿における仮説を検証するためには、家族というグループにおけるbaG（基底的想定グループ）、およびWG（作動グループ）、そして個人の「原子価」（valency：以下、V）を測定するための尺度が必要である。しかし、そのような尺度が存在しないので、以下のような方法で行うこととする。

まず、家族グループにおけるWG、および各baGに相当する内容を測定する尺度として、グループにおけるWGとbaGの測定法として開発され、信頼性および妥当性が検証されている尺度（黒崎，1999）を用いることとした。但し、この尺度は主に実験的グループにおける言動内容を測定するためのものであるため、不必要な項目を削除したり、複数の項目を統合するなどの修正を加え、全16項目とした。各項目内容は、以下の通りである。

WGを測定するための項目は、①問題についての現実的な側面（時間、作業量等）を意識した表現、②問題解決や目標達成を意識した表現、③グループ（家族成員や全体）の発達や成長を意識した表現の3項目とする。baD（依存基底的想定）を測定するための項目は、①指示、援助要求を含む表現、②グループ内の人や環境に対する依存の表現、③グループ外の人や環境に対する依存の表現、④グループを依存させようとするような行動や表現、⑤現在よりも過去を重視・美化するような表現、⑥低い自己評価の表現の6項目とする。baF（闘争基底的想定）を測定するための項目は、①グループ内・外の人・環境に対する攻撃（批判、反発）的表現、②個人よりもグループを重視するような表現、③自分の意見への固執、押しつけを含む表現の3項目とする。baFI（逃避基底的想定）を測定するための項目は、①グループをリラックスさせるような表現、②攻撃（葛藤）を避けるような行動や表現の2項目とする。baP（つがい基底的想定）を測定するための項目は、①性的な、または特定の2人を意識した行動や表現、②グループより個人を重視するような表現、③未来に対する期待・希望、理想を目指すような表現、④民主主義的表現の4項目とする。

次に、不登校をしている本人の原子価を測定するための尺度として、Hafsi（2005）が挙げているFIV（逃避原子価）の特徴を参考に、①葛藤回避傾向を表す言動や表現、②逆依存傾向を表す言動や表現、③過剰な遠慮を表す言動や表現、④物理的・精神的距離感を表す言動や表現、⑤プライバシー重視を表す言動や表現、⑥周囲の人や環境に対する警戒心の強さ、過敏傾向を表す言動や表現、⑦周囲の人や環境に対する否定的勘定を表す言動や表現、⑧ユーモアを含む言動や表現の全8項目からなるFIV測定尺度を作成し、用いることとした。

以上の尺度を用いて、家族グループにおけるWGとbaDに相当する特徴の有無およびその数、不登校が始まるより以前の素材を対象に、他のbaG、すなわちbaF、baFI、baPに相当する特徴の有無およびその数、baDに相当する特徴に固執する傾向を示す表現、不登校をしている本人の言動や性格等の素材を対象に、逃避原子価に相当する特徴の有無およびその数、不登校と関連して家族グループにみられるbaFIに相当する特徴の有無およびその数を測定した。

V. 結果

上述した方法で集められた臨床的素材を分析し、測定結果をまとめたものが、表2～5. である。

まず、表2. にある通り、家族グループにみられたWG（作動グループ）に相当する特徴を示す内容は、全37のうち15事例（40.5%）に認められた。そして、baD（依存基底的想定）に相当する特徴を示す内容は、26事例（70.2%）に認められた。WGとbaD両方の特徴がみられたのは、12事例（32.4%）であった。

具体的には、WGの特徴②に相当する内容として、「学校に一刻も早く登校させたい」（事例6他）、同じくWGの特徴③「躰に厳しい」（事例23他）、「勉強に厳しい」（事例11他）などが多くみられた。

baDを表す内容としては、特徴④「グループを依存させるような行動や表現」に相当するものが最も多くみられ、なかでも「過保護・過干渉」（事例3他）に類するものが多かった。次いで、特徴⑥「低い自己評価の表現」に相当するものとして、「子どもの不登校に対する責任・罪悪感」（事例24他）などが多くみられた。

以上の結果から、仮説1の「家族グループにおける、作動グループと依存基底的想定との結びつき」は、部分的に検証されたと言える。

次に、表3. にある通り、家族グループにみられたbaD以外のbaG、つまりbaF（闘争基底的想定）、baFI（逃避基底的想定）、およびbaP（つがい基底的想定）を受け入れない、或いは抑制するような表現は、全37のうち7事例（18.9%）に認められた。具体的には、baFIの特徴①「グループをリラックスさせるような表現」を受け入れないことに相当するものとして、「子どもが現実逃避して、だらだらしているのを見るのは不快、怠けているとしか思えない、子どもがだらだとしていてのは嫌で耐えられない」（事例23他）、つがい基底的想定の特徴①が受け入れられていないことに相当する表現として、「子どもたちの親としてだけ繋がっていて夫婦という気がしない」（事例26他）が挙げられる。しかし、闘争基底的想定の抑制を明確に示すような表現は抽出されず、全体的にみても、明確にそのことを表現しているものは少ないと言える。

また、baDの特徴を表す6項目に固執する傾向を示す表現には、「両親から言われることを真に受けて何も言えなくなる」（事例8）、「母親の希望で進学した、自分で行動している実感が無い」（事例11）の2つが測定された。

以上の結果から、仮説2の「(WGとbaDとが) 厳格な共謀的關係であるために、同グループにおける闘争・逃避、およびつがいの欲求が表現・充足されるための受け皿を失っている」は部分的に検証されたが、測定された数が少ないため不十分な点が残る。

続いて、表4. にある通り、不登校をしている本人の言動や性格等の内容に、FIV（逃避原子価）の特性に相当するものは、全37のうち36事例（97.2%）に認められた。具体的には、特徴①「葛藤回避傾向を表す言動や表現」に相当するものが最も多く、例えば「冒険物語やゲームの世界に没頭する」（事例6他）、「相手に合わせてしまう」（事例21他）、「うん、別になど曖昧な返事が多い」（事例4他）などが挙げられる。次に多かったのは特徴⑥「周囲の人や環境に対する警

表 2. 家族グループにみられた、作動グループ、および依存基底的想定を表す特徴

事例	作動グループ (work group)				依存基底的想定 (basic assumption of dependency)						
	特徴①	特徴②	特徴③	合計	特徴①	特徴②	特徴③	特徴④	特徴⑤	特徴⑥	合計
1		1		1				1		1	2
2											
3			1	1				1		1	2
4											
5											
6		1		1				1			1
7		1	1	2		1	1	1			3
8							1	3		2	6
9		1		1			1	1		1	3
10		1		1			1				1
11			1	1		2	1		1	1	5
12								1			1
13						4	1	3		1	9
14						1	1	5		4	11
15			1	1							
16		1		1			1				1
17		1		1				1			1
18					1	1		1		2	5
19											
20											
21	1			1						1	1
22		1		1							
23	1	1	1	3		3	1	2			6
24		1		1						1	1
25											
26						3		1			4
27								2			2
28										1	1
29											
30											
31						1		2			3
32								1			1
33						1		2			3
34										1	1
35			1	1							
36								1		2	3
37								2		1	3
合計	2	10	6	18	1	17	9	32	1	20	80

注) 作動グループ

特徴① 問題についての現実的な側面(時間、作業量等)を意識した表現

特徴② 問題解決や目標達成を意識した表現

特徴③ グループ(家族成員や全体)の発達や成長を意識した表現

依存基底的想定

特徴① 指示、援助要求を含む表現

特徴② グループ内の環境に対する依存の表現

特徴③ グループ外の環境に対する依存の表現

特徴④ グループを依存させるような行動や表現

特徴⑤ 現在よりも過去を重視(美化)するような表現

特徴⑥ 低い自己評価の表現

表 3. 家族グループにみられた、他の基底的想定に対する否定的表現

事例	闘争基底的想定				逃避基底的想定			つがい基底的想定の特徵				
	特徴①	特徴②	特徴③	合計	特徴①	特徴②	合計	特徴①	特徴②	特徴③	特徴④	合計
1												
2												
3												
4												
5												
6												
7						1	1					
8												
9												
10												
11						2	2	1				1
12												
13												
14												
15												
16												
17												
18						1	1					
19												
20								3				3
21												
22												
23					1		1					
24												
25												
26								4				4
27								1				1
28												
29												
30												
31												
32												
33												
34												
35												
36												
37												
合計				0	1	4	5	9				9

注) 闘争基底的想定

特徴① グループ内・外の人・環境に対する攻撃〈批判、反発〉的表現

特徴② 個人よりもグループを重視するような表現

特徴③ 自分の意見への固執、押しつけを含む表現

逃避基底的想定

特徴① グループをリラックスさせるような表現、②攻撃〈葛藤〉を避けるような行動や表現

特徴③ 攻撃(葛藤)を避けるような行動や表現

つがい基底的想定

特徴① 性的な、または特定の2人を意識した行動や表現

特徴② グループより個人を重視するような表現

特徴③ 未来に対する期待・希望、理想を目指すような表現

特徴④ 民主主義的表現

表4. 本人にみられた逃避原子価の特徴

事例	特徴①	特徴②	特徴③	特徴④	特徴⑤	特徴⑥	特徴⑦	特徴⑧	合計
1	5								5
2	4	4		1		15	3		27
3	2	3		1		2			8
4	4	1							5
5									
6	3	1		4		4	4		16
7	2	1							3
8	2	1				3			6
9	3	2	1	1		5	1		13
10	1	3	2	2		2			10
11	5			3		2			10
12		2	3			6			11
13	2	2		1		1	1		7
14	3					3	2		8
15	5			1		2			8
16		3		1		1			5
17	4			2		2	1		9
18	1	2	1			3	1		8
19	4	1	1	2		7	3	1	19
20	1	1	1	2	1	4		1	11
21	4	1	1	4		2			12
22	3					2	1		6
23	6			1		1	1		9
24	1								1
25		1							1
26	2	2				1			5
27		1					1		2
28	3					1	1		5
29	5			1		2			8
30	1			1					2
31	5	3	4	2		3	4		21
32	8			2		1	2		13
33	1			1			1		3
34						1			1
35	1					1			2
36						3	1		4
37	1		1			4	3		9
合計	92	35	15	33	1	84	31	2	293

- 注) 特徴① 葛藤回避傾向を表す言動や表現
 特徴② 逆依存傾向を表す言動や表現
 特徴③ 過剰な遠慮を表す言動や表現
 特徴④ 物理的・精神的距離感を表す言動や表現
 特徴⑤ プライバシー重視を表す言動や表現
 特徴⑥ 周囲の人や環境に対する警戒心の強さ、過敏傾向を表す言動や表現
 特徴⑦ 周囲の人や環境に対する否定的勘定を表す言動や表現
 特徴⑧ ユーモアを含む言動や表現

戒心の強さ、過敏傾向を表す言動や表現」に相当するもので、例えば「クラスメイトに嫌われているのではないかと思う」(事例2他)、「人との関係に入っていくのが不安で怖い」(事例6他)、「友だちに会うかも知れないからと自宅に引きこもる」(事例26他)などが挙げられる。他に、特徴②「逆依存傾向を表す言動や表現」に相当するものとしては、「バイトをして自信を取り戻す」(事例9他)など、特徴③「過剰な遠慮を表す言動や表現」に相当するものとしては、「嫌われるような態度をしないよう気を配る」(事例12他)など、特徴④「物理的・精神的距離感を表す言動や表現」に相当するものとしては、「周囲から浮き上がった存在」(事例2他)など、特徴⑦「周囲の人や環境に対する否定的感情を表す言動や表現」に相当するものとしては、「同年代の女の子が示す興味・関心に対して侮蔑的」(事例6他)などがみられた。

以上の結果から、仮説3の「その結果として、逃避原子価を持つ家族グループメンバーがその受け皿となる」は、ほぼ検証されたと言える。

最後に、表5.にある通り、不登校経過中に、家族グループにbaFI(逃避基底の想定)の特徴に相当する内容が認められたのは、全37のうち26事例(70.2%)であった。具体的には、特徴①「グループをリラックスさせるような表現」に相当するものとしては、「家族全員だらっと一緒に過ごす」(事例23)、「冗談が出てくるようになった」(事例13)など、特徴②「攻撃(葛藤)を避けるような行動や表現」に相当するものとしては、「家族全体が学校に行かないことを容認する雰囲気」(事例1他)、「学校に対する不満が大きい」(事例17他)などが挙げられる。学校への不満を本人や家族が述べるというのは多くの事例にみられたが、これはそのことによって家族グループ内の問題に直面することによって生じる葛藤を回避することに役立つという意味で、特徴②に含まれると判断した。

以上の結果から、仮説4の「不登校によって、自身および家族グループ全体の逃避的欲求が表現・充足されている」は、ほぼ検証されたと言える。

表5. 不登校経過中にみられた、家族グループにおける
逃避基底的想定を表す特徴

事例	特徴①	特徴②	合計
1		1	1
2		2	2
3		2	2
4		1	1
5			
6		2	2
7	1	4	5
8		4	4
9	3	2	5
10		4	4
11			
12			
13	1	1	2
14	2	8	10
15			
16			
17		1	1
18		2	2
19			
20			
21		1	1
22		1	1
23	2	7	9
24		1	1
25		2	2
26		3	3
27		4	4
28			
29		1	1
30			
31			
32	1	1	2
33		1	1
34			
35	3	21	24
36		3	3
37		3	3
合計	13	83	96

注) 特徴① グループをリラックスさせるような表現
特徴② 攻撃(葛藤)を避けるような行動や表現
特徴③ 攻撃(葛藤)を避けるような行動や表現

VI. 考察

本稿の目的は、近年の不登校に関する事例研究の内容を用いて、家族グループ現象としての不登校に関する4つの仮説を検証することであった。

そのために、まず29の文献から37の事例を抽出した。次いで、グループにおけるWG（作動グループ）、およびbaD（依存基底的想定）を測定するための尺度（WG：3項目、baD：6項目）、グループにおいて他のbaG（基底的想定グループ）、つまりbaF（闘争）、baFI（逃避）、およびbaP（つがい）が受け入れられない、または抑制されていることを測定するための尺度（baF：3項目、baFI：2項目、baP：4項目）、本人の逃避原子価を測定するための測定尺度（8項目）、不登校と関連して表現・充足される家族グループのbaFIを測定するための尺度（2項目）を用いて、それらの事例から得られる臨床的素材を測定した。

その結果、仮説1の「家族グループにおける、作動グループと依存基底的想定との結びつき」については、WGとbaD両方の内容を含む事例は全体の32.4%であったが、baDに相当する内容は全体の70.2%に認められた。このことから、仮説1は部分的に検証されたと言える。この差は、WGに相当する内容を含む事例が全体の40.5%と少なかったためであるが、それには、このような事例におけるWGの特徴に相当する内容が、「学校に行く」とか、「子どもの成長を願う」など事例の前提になっているようなものであり、事例の経過のなかに取って明確なかたちで記載されることが少ないためであろうと考えられる。

次に、仮説2の「(WGとbaDとが) 厳格な共謀的關係であるために、同グループにおける闘争・逃避、およびつがいの欲求が表現・充足されるための受け皿を失っている」については、3つを合わせてもそれらを抑制したり受け入れないという表現が明確に測定されたのは全体の18.9%に過ぎなかった。従って、本稿において仮説2が検証されたとは言えない結果となった。これについては、抑制されているために事例経過のなかに表現されることも、取り扱われることもなかったということが考えられる。baDを示す内容の多さからも、他のbaGが非活動的であったことは予想できるが、この仮説検証については課題が残るかたちとなった。

続いて、仮説3の「その結果として、逃避原子価を持つ家族グループメンバーがその受け皿となる」については、不登校をしている本人の言動や性格等に、FIV（逃避原子価）の特性に相当する内容を含む事例が全体の97.2%に認められたことから、本仮説はほぼ検証されたと言える。本人の特徴として測定外の内容に、「自己評価が低い・自分に自信がない」というのも多かった。これは、単純に評価するならば依存原子価の特徴に相当する内容であると考えられる。しかし、個人の活動的原子価は1つだけであり、逃避と依存の原子価が同時に同じ強さで示されるということはある得ないので、そのような単純な評価をすべきではないと筆者は考える。この場合、ある行動（例えば退行して親に甘えるなど）からみてそれが依存的であるようにみえたとしても、その目的には大きく2つがあると考えられる。1つは、単純に親に甘えることにより依存的欲求を満たすためであり、もう1つは家族グループの支配的なbaGに行動を合わせることで葛藤を回避するためである。筆者が考える不登校のメカニズムからみて、後者の可能性が高いと考え

られるが、その具体的な検証については今後の研究課題であると考ええる。

最後に、仮説4の「不登校によって、自身および家族グループ全体の逃避的欲求が表現・充足されている」については、不登校経過中に、家族グループにおいてbaFl（逃避基底的想定）の特徴に相当する内容を含む事例が全体の70.2%に認められたことから、本仮説についても、ほぼ検証されたと言える。

また、仮説の検証には直接関わらないが、事例の経過のなかで、家族がWGとbaDとの厳格な共謀的關係に相当する内容への気づきを得ることにより、家族グループ内力動に変化が生じたというものが少なからずみられた。例えば、事例7における「子どものためと思ってやってきたことは、本当にそうだったのだろうか」という母親の発言や、事例23における「恵まれた環境が・・・しんどかったかも知れない」という両親の発言などにそれが現れていると考えられる。両事例とも問題の解決とともに終結していることから、こういった気づきを得られたことが家族グループの援助につながっていることを示唆するものであると考えられる。

今後の課題としては、本稿で十分な検証をすることができなかった仮説1・2について引き続き検証を行っていくと同時に、特に不登校事例について多くみられる依存的な言動や振る舞いの無意識的な目的にも焦点を当て、研究を進めていきたいと考える。

注

- 1) 「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるため年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」文部科学省。
- 2) 国立情報学研究所 論文情報ナビゲータ <http://ci.nii.ac.jp/cinii/servlet/CiNiiTop#>

参考文献

- 1) Bion, W., *Experiences in Groups and other Papers*. 1961. Tavistock Publications. 集団精神療法の基礎 現代精神分析双書 17 池田数好訳 1973 岩崎学術出版社。
- 2) Freud, S., *The Ego and the id*, S. E. 19 1923 「自我とエス」井村恒郎訳 フロイト選集4 日本教文社。小此木啓吾訳 フロイト著作集6 人文書院。
- 3) Freud, S., 1921. *Group psychology and the analysis of the ego. Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*, Vol. 18. London: Hogarth Press. 「集団心理学と自我の分析」小此木啓吾訳 フロイト著作集第6巻 自我論・不安本能論 1970 人文書院。
- 4) Grinberg, L., Dario Sor and Elizabeth de Bianchedi (Translated from the Spanish by Alberto Hahn), 1977. *Introduction to the work of-Bion*. Jason Aronson, Inc. ビオン入門 現代精神分析双書第Ⅱ期 第8巻 高橋哲郎訳 1982 岩崎学術出版社。
- 5) Hafsi, M., 2002. 触媒としての「特殊作動グループ」集団精神療法 第18巻 1号
- 6) Hafsi, M., 2003. ビオンへの道標 ナカニシヤ出版。
- 7) Hafsi, M., 2004. 「愚かさ」の精神分析 ビオンの観点からグループの無意識を見つめて ナカニシヤ出版。

- 8) Hafsi, M., 2005. ビオンによる『原子価』の再考、明瞭化と展開～対象関係の「化学」の探究～
- 9) Hafsi, M., 2006. 対象関係の病理学を理解する頂点としての『マイナス原子価』～あるマイナス原子価を持った男性の例～ プシコフィリア研究 第3巻.
- 10) Rioch, M., 1976. *The Work of Wilfred Bion on Groups*. In Kissen (Ed.), *From group dynamics to group psychoanalysis: Therapeutic applications of group dynamic understanding*. New York: John Wiley & Sons. モートン・キッセン編 集団精神療法の理論－集団力学と精神分析学の統合 佐治守夫・都留春夫・小谷英文訳 1996.

謝辞

本稿執筆にあたりご指導いただきました、奈良大学メッド ハフシ教授、神戸学院大学植村 亘教授、神戸学院大学前林 清和教授に感謝致します。